

絵画を通じた震災・命の授業 『命の一本桜』プロジェクト



兵庫県神戸市 アトリエ太陽の子
主宰・代表 中嶋 洋子

1 防災への取組のきっかけ

私が主宰する造形絵画教室アトリエ太陽の子では、子供達に絵を描く喜びを伝えるだけでなく『震災・命の授業』を行うことで、絵画を通じた防災意識の向上、助け合いの心、命の尊さについて学んでもらっています。



震災・命の授業

キッカケは1995年。私達の住む神戸を襲った阪神・淡路大震災。自宅は一部損壊。子供達の作品を保管していたアトリエは全壊。アトリエの各教室は全て地域の避難所となりました。何よりも辛かったのは愛しい愛しい教え子2名とご家族あわせて5名が、あの震災で尊い命を奪われてしまったことです。

震災から2か月が過ぎ、保護者の方々から教室再開を希望する連絡が相次ぎました。理由は…「子供が暗闇を怖がるようになった」「チック症が出てきた」「情緒不安定になった」そして何よりも一番辛かったのは「子供が笑わなくなった」というご相談でした。

子供達の心の危機を感じ、震災から3か月後の4月、なんとか会場を確保して教室を再開。久しぶりに再会する子供達。最初はこわばっていた表情の子供達も、思いっきり絵を描きましょう！と授業を進めるうちに子供達から笑顔がみえ、また鼻歌まで聞こえてきました！

私は「子供達の心のケアに絵画がとても重要だ。」ということ、あの阪神・淡路大震災を経験して強く感じました。

アトリエでは、その後、新潟県中越地震、インド洋大津波被災地のスリランカ、中国四川大地震被災地の小学校等に、神戸の子供達が描いた激励の絵をお送りしたり、子供達が思いっきり絵が描ける様に、画材を送る支援を続けてきました。

そして2011年3月11日の東日本大震災。あまりもの惨状に居てもたってもいられず、震災の翌月の4月24日から岩手県、宮城県の避難所や小学校等に伺い、心のケアの為に絵画ワークショップを実施。「地震があったから、こんなに楽しいことはなかった！」と、子供達。「子供達が喜ぶ声を聴いてホッとしました。」と地域の方々。校長先生、教



希望の巨大コイノポリ制作（宮城県気仙沼市立階上小学校）

頭先生からも「完成作品を昇降口に飾ることで、欠席者が減りました。確実に子供達は元気と希望を頂きました！」と仰って頂きました。

岩手県、宮城県、福島県の被災地の小、中学校など、震災後6年間で、のべ60校、4,000人以上の子供達に、心のケアの為に絵画ワークショップ（希望の巨大コイノボリ制作、とびきり笑顔の自画像横断幕、命のヒマワリプロジェクト、干支の色紙絵画など）を実施しました。中でも一番喜ばれたのが『命の一本桜』プロジェクトでした。



東北での『命の一本桜』プロジェクト

2 『命の一本桜』プロジェクト

桜は出発の象徴。桜色は人を幸せにし、心を温かく包み込む色です。地震にも津波にも負けない様、大地にしっかり根を張り、まっすぐ立つ姿は未来を背負って立つ子供達になぞらえたものです。一枚の作品は3.2m×8m。桜の花は筆など道具ではなく、手のひらに絵の具を塗り、紙に手形を押し当て、体内のストレスが手のひらから発散される効果があります。約1時間で完成し、友と心を合わせて描くことで得る達成感、助け合いの心を体感。完成作品は地域の復

興関連行事や、入学式、卒業式に展示して頂き、地域の皆さんにも「大人も励まされた！」と、嬉しいお声が届いています。その後も平成28年熊本地震の被災地でも、この『命の一本桜』プロジェクトを実施（熊本県御船町立御船中学校では、滝尾小学校との合同授業460名での大規模共同制作を行いました!）。



熊本県御船町立御船中学校では、滝尾小学校と合同で『命の一本桜』プロジェクトを実施

兵庫県内でも防災教育の入り口として、小学校や幼稚園から『命の一本桜』プロジェクトのご依頼も頂いています。

3 絵画の可能性を信じて

被災地の子供達は、突然に奪われてしまった日常、不満やストレスを十分に言葉で表現出来ません。だからこそ全身で描きながら、全身で思いっきり語っているのだと思います。

友と協力して得られる達成感は、その後の日々の大きな活力となっていきます。これからも子供達の心のケアの為に、この『命の一本桜』プロジェクトを続けていきたいと思っています。